

第10回(船引高等学校野球部 菅波智之)

「徳川家康」 (山岡壮八著 講談社)

この著書は完結までに17年以上の歳月を要し、使われた原稿用紙が17,400枚といわれ、ギネスブックにも「世界最長小説」として認定されています。私自身そのボリュームに圧倒され、40歳を過ぎるまで手に取ることをためらっていました。しかし、読み終えたときは、徳川家康を通し、改めてこの国が深い運命や因縁、無常のうえに成り立っていることを実感いたしました。

武将としては、織田信長ほどの豪壮さも豊臣秀吉ほどの絢爛さも家康にはありません。しかしながら、戦では将棋のように何て先も読んで布石を打っていく頭脳や、多くの武将の経験を自分に置き換え、今後の教訓としてそれらを生かそうとする謙虚さ、想像力の豊かさは家康の魅力の一つであります。

また、三河武士の特徴とはいえ、本多作左衛門や大久保彦左衛門に代表されるような、主君を平気で罵倒したり擲諭をするような家臣が育っていくのも、ある意味家康の人を引き付ける求心力であります。

家康が信長や秀吉と異なるのは、戦乱と呼ばれる時代を生きるにあたって、己の感情を頑なまでに押し殺し、仏の権化としてこの国を天下泰平の世に導こうとする強い意志だったのではないのでしょうか。そして、その強い意志が江戸時代300年にわたる平和国家の礎となったのでしょう。

「忍耐」「我慢」の繰り返しであった家康の生涯をはじめ、家臣の不義、武田信玄との争い、自害に追い込まざるを得なかった長男信康への無念さ、秀吉亡き後の豊臣家とのしがらみ、関が原の戦いや家康最後の戦いとなる大阪夏の陣と様々な人間模様を描くこの著書は読み応えのあるとともに、深く考えさせられるものであります。

様々な分野で活躍する人の中で、この著書を人生の指南書とかバイブルにあげる理由は、読む立場の人それぞれによって、多種多様な捉え方ができる順応性にあることだとも感じました。